

# 城山麓の墓所 (二)

先人の跡をしるのぶ

山本

保

(会員・佐伯市池船)

## 一 松下筑陰の墓

養賢寺(禪宗・臨濟宗妙心寺派)の裏手、毛利家菩提所の真上にあたる老松の中に松下筑陰の墓がある。

世民篤修居士

文化七年八月二十四日

と法名と死去の年月日が刻み込まれていて、松下家一族の墓が、ずっしりと並んでいる。

筑陰は、筑後・久留米(有馬家二十二万石)の生まれであったが、日田で塾を開き、広瀬淡窓、僧雲華などを教えた。

寛政六年(一七九四)第八代藩主毛利高標は、彼を招へいして四教堂教授に任命した。

その翌年の春、広瀬淡窓(当時十四歳)は、佐伯藩の儒官であった筑陰を訪ねて、日田から佐伯へ、そして四

月より八月までの五日間、滞在して勉学に励んだ。

佐伯到着の様子を次のように述べている。

城下ノ口ニ角石(西谷区)ト云フ閑所アリ。閑吏詰問スルコト嚴ナリ。予ガ松下氏ノ客タルコトヲ聞キテ、速カニ通シタリ。

佐伯ノ城ハ大手ノ門、南ニ向イタルト覺エタリ。

山城ニシテ、城門並ニ侯宮(三の丸御殿)ハ山下ニアリ。楼櫓ノ類ハ山頂ニ見エタリ。其ノ規模竹田(岡藩七万石・中川侯)ニ比スレバ小ナリ。

然レドモ又名城ナリ。佐伯の先侯(初代藩主毛利高政)ハ我が日田ニ居玉イシナリ。亀王山其ノ城跡ナリ。慶長年中(慶長六年四月五日)ニ彼地(佐伯)ニ封ヲ移サレシトゾ。

城門ニ入りテ、其ノ左ニ学校アリ。四教堂ト云ウ。コレハ今ノ佐伯侯ノ叔父扶搢公子(森繁)ト云ウ人

アリ、肥前ノ大内熊耳先生ノ門人ニシテ、有名ノ文人ナリ。其ノ旧宅ヲ以テ学校トセシ者ナリ。

松下ノ宅ハ、其ノ隣ニアリ。

佐伯城下ハ海ニ浜シタリ。浦ノ数凡ソ九十九浦アリタリ。土地セマシト雖モ魚塩ノ利多ク、士民富饒ナリ。

其ノ城ヲ鶴城ト号ス。

また、佐伯遊学の理由を左のように記述している。

寛政七年乙卯。予年十四ナリ。魚屋ニアリ。先考

(父)ノ膝下ニ陪ス。去年松下先生佐伯ニ赴カレ、

法蘭上人遷化(死去)セラルルニヨリ、師トスルモノ

ノナシ。先考命ジテ、佐伯ニ行キ、松下先生ニ陪侍シ  
歸リテ後ハ、他邦ニ遊ブベシトナリ。

因ツテ、専ラ佐伯行ノ事ヲ謀レリ。

彼は、四月一日日田出發——出口着(一泊)。四月二

日出口出發——黒川着(一泊)。四月三日黒川出發——

久住着(一泊)。四月四日久住出發——竹田着(三泊)

四月七日竹田出發——中ノ谷着(一泊)。四月八日中ノ

谷出發——日暮れに佐伯城下着。

下男治助と一緒に、七泊八日の長い旅行で、やっと佐伯にたどりついた。

聞くところによれば、淡窓は多病で、佐伯遊学以後、日田を離れることなく、一生涯旅行しなかつたといわれている。

広瀬淡窓全集の「懐旧樓筆記」巻五の中に、次のような記述もある。

龍鼎山ハ養賢寺ノ山号ナリ。

養賢寺ハ頗ル大地ニシテ、佐伯侯ノ菩提所ナリ。

家中(藩士)ノ墓モ、多ク其ノ所ニアル由ナリ。

予彼ノ地ニアリシ中、其ノ寺ノ隱居ニ相見シタリ。

詩ヲ能クスル人ニテ、共ニ詩會ヲナセシコトアリシナリ。

寛政の頃、御典医今泉元甫が作った「三義井」の一つ、城下西町にある井戸「唾泉」(あせん)の四角の井げたには、当時、学者三大名の一人と喧伝された豊後佐伯藩主毛利高標(佐伯文庫八万巻の創設者)の題字と、四教堂教授松下筑陰の碑文が彫り込まれているが、これは異例なことであり、主君と家臣との親密な交わりをうかがうことができる。

殿様から信頼された筑陰は、佐伯藩随一の儒学者であった。

遺著『梅祥書屋存稿』上下二巻は、市内花園区の松下

家に所蔵されている。

## 二 明石秋室の墓

松下筑陰の墓へ通じる道の途中に、明石秋室（大助）の墓がある。

正統院龜峯良監居士

明石大助肅墓

慶応元年十一月二十二日

と、戒名と死去月日が刻まれている。

秋室は、杵築藩士（松平家三万二千石）豊田家より、親類筋に当たる明石家へ養子入りをしたが、幼少より衆にすぐれ、博覧強記の聞こえが高く、書道は三浦黄鶴（梅園の嗣子）、絵画は錦木雲潭（谷文晁の門人）、詩は矢野毅郷について学んだ。

彼は「佐伯はへんびな小藩（二万石）であるが、万巻の書物が備えつけられているので、大いに勉強したい」と希望した。

第八代藩主毛利高標は、学問好きで、哲学・文学・語学・史学・地誌・医書など八万巻余りを購入し、三の丸の書庫に保管し、佐伯文庫と命名した。

特に、輸入書の収集に意を注ぎ、清国船が長崎に入港するたびに、藩士関谷儀右衛門を派遣し、唐宋の貴重本を始め、オランダの医書・科学書を集めた。毎年数千金

を投入したと言われている。

秋室は、学問所詰、中士、準上士へと昇格し、ついに憧れの書物奉行に栄進した。他方、佐伯文庫の蔵書を片っぱしから読破し、この独学研磨によって清国の文化にも精通して、その学殖はますます深くなった。

書物奉行職にあること、実に十八年の長きに亘り、四教堂出仕を命ぜられ、のち町方郡方奉行に昇進した。

文政十一年（一八二八）第十代藩主毛利高翰は、佐伯文庫の蔵書二万八百巻余りを徳川幕府に献上した。堅田並びに床木の天領（幕府領）二千石を佐伯藩領に返還してもらいたいとの願望であった。書物奉行の秋室は、家老関谷隼人（『温故知新録』の著者）の指示に従い、四教堂教授中島子玉等と寝食を忘れて、この事に没頭した。彼等は二万巻余りの書籍と別れることに、断腸の思いをしたことであろう。

生来寡黙な秋室は、超然として時流におもねらず、公務の外は、家に在って思索と執筆に専心した。

文久二年（一八六二）に隠居して、悠々自適の生活に入ったが、慶応元年七十三歳で死去した。

松下筑陰、中島子玉に比べて、長生きをしている為、多数の詩書を残し、佐伯市内をはじめ、県下各地にその遺墨を愛蔵しているものが多い。